山口大学教育学部研究論叢　第73巻　287頁～303頁　2024年1月

重度・重複障害等を有する生徒へのキャリア教育

～衣服の自己選択によるＱＯＬ（生活の質）の向上～

山本　礼子*・松田　信夫**

Career Education for Children with Severe and Multiple Disabilities
～ Improved Quality of Life through Self-selection of Clothes ～

YAMAMOTO Reiko*, MATSUDA Nobuo**

(Received September 29, 2023)

第１として、重度・重複障害等を有する生徒の衣生活に関する意識調査を行った。その結果、生徒は自分の着る服を自身で選ぶことは少なく、保護者が選んだ服を受動的に着ていることが明らかになった。第２として、生徒の衣生活への関心を高めさせることを目的に、文化祭にてファッションショーを実施した。事後アンケートから、出演した生徒は着装を人に褒められることから自己有用感を高め、また観客となった生徒や保護者、教員には衣服指導への理解が高まったことが示された。第３として、シミュレーションソフトを用いて衣服の色やコーディネートを画面上で生徒が選び、意見を述べ合う学習指導を行ったところ、色彩や組み合わせの知識が豊かになることで、衣服を主体的に選択しようとする意欲が高まった。これらから、生徒の余暇や卒業後の衣生活を念頭に置き、衣服の選び方、着装の知識を指導していくことが生徒のQOL（生活の質）を向上させると推察された。

１　研究の背景と目的

中央教育審議会（2011）は、キャリア教育を「一人ひとりの社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育成する教育」ととらえ、「社会的・職業的自立、社会・職業への円滑な移行に必要な力」の要素の構造を図１のように示した。同時に、今後のキャリア教育の中心課題として、図中の「基礎的・汎用的能力」を確実に育成し、実践的・体験的な活動を充実させることを提言した。この能力の構成要素として「人間関係形成・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」の四能力があり、これらの育成には、他者と協力・協働する姿勢、自己の役割の理解、肯定的な自己理解、働くことの意義の理解、将来設計の力等の育成が鍵となると考えられる（表１）。なお、ここでいう「社会的自立」とは一般就労を中心とした職業的自立のみをめざしたものではなく、より広義の自立をめざしたものであり、「基盤となる」とは例えば就労のための知識・技能等、特定の領域のものを意味するのではなく、広義の自立のための基盤・土台となる能力や態度を意味するものであることに留意する必要がある。

第一筆者が2015年当時勤務していた山口県立下関南総合支援学校（以下、本校）は、2007年度まで県内唯一の県立盲学校として歴史を積み重ねてきたが、2008年度より総合支援学校と名称を改め、障害の種別を超えた原則五障害の児童生徒を育成する特別支援学校として新たな歩みを開始した。現在では視覚障害、知的障害、肢体不自由、重度・重複障害等の児童生徒が学んでいる。本校でも児童生徒の障害の多様化と重度・重複化が進む中で、第一筆者は医療的ケア対象の生徒の担任として過ごし、同時に専門教科である家庭科を担当していた。人の一生をライフステージでとらえる家庭科の中に、障害が重度といわれる生徒も含めた、全ての生徒に通じる「キャリア教育」の必要性を強く感じていたことから、特別支援教育の家庭科とキャリア教育の複合的な実践研究を試みることとした。表１に示す基礎的・汎用的能力の中でも

＊ 山口県立山口総合支援学校みほり分校，〒753-0214　山口市大内御堀5－2－8，sch571@m.ysn21.jp
＊＊ 山口学芸大学教育学部，〒754-0032　山口市小郡みらい町1－7－1，nmatsuda@y-gakugei.ac.jp（山口大学名誉教授）

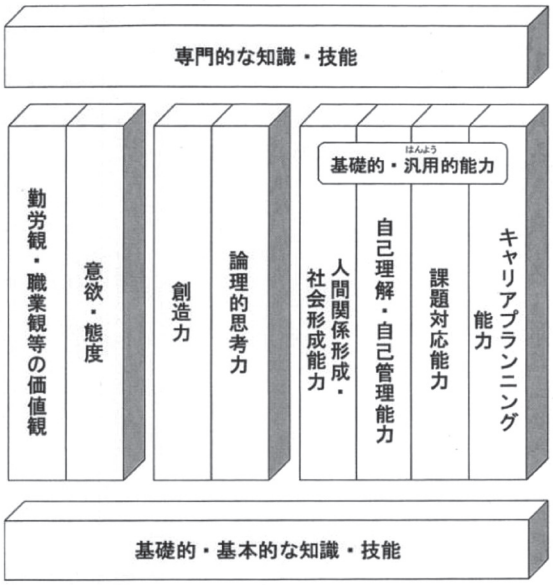


図１　「社会的・職業的自立、社会・職業への円滑な移行に必要な力」の要素（中央教育審議会、2011）

表１　「基礎的・汎用的能力」の具体

	具　体
人間関係形成・社会形成能力	多様な他者の考えや立場を理解し、相手の意見を聴いて自分の考えを正確に伝えることができるとともに、自分の置かれている状況を受け止め、役割を果たしつつ他者と協力・協働して社会に参画し、今後の社会を積極的に形成することができる力
自己理解・自己管理能力	自分が「できること」「意義を感じること」「したいこと」について、社会との相互関係を保ちつつ、今後の自分自身の可能性を含めた肯定的な理解に基づき主体的に行動すると同時に、自らの思考や感情を律し、かつ、今後の成長のために進んで学ぼうとする力
課題対応能力	仕事をする上での様々な課題を発見・分析し、適切な計画を立ててその課題を処理し、解決することができる力
キャリアプランニング能力	「働くこと」の意義を理解し、自らが果たすべき様々な立場や役割との関連性を踏まえて「働く」ことを位置づけ、多様な生き方に関する様々な情報を適切に取捨選択・活用しながら、自ら主体的に判断してキャリアを形成していく力

「自己理解・自己管理能力」は、児童生徒による主体的、積極的な学習を通して育成される能力であり、重度・重複障害を有する児童生徒にとってもこの能力の育成は重要な課題である。また特別支援学校小学部・中学部学習指導要領（2017）及び特別支援学校高等部学習指導要領（2019）にも、児童生徒が主体的に「選択」する機会を設けるなど、児童生徒の興味・関心を生かした自主的、自発的な学習が促されるよう工夫する必要性が述べられている。そこで、家庭科の中でも特に衣服指導に着目し、衣服を自己決定（選択）して自分らしく着ることがＱＯＬ（生活の質）の向上につながるととらえ、ファッションショーを含む実践研究を通して検証することを本研究の目的とした。なお、第二筆者は第一筆者のスーパーバイザーとして参画した。

２　定義

本研究でのキーワードとなる「重度・重複障害者」「自己決定」について、以下のように定義する。

（１）「重度・重複障害者」

特別支援学校学習指導要領解説総則編（2019）によると、「重複障害者」とは「当該学校に就学することになった障害以外に他の障害を併せ有する児童生徒であり、視覚障害、聴覚障害、知的障害、肢体不自由及び病弱について、原則的には学校教育法施行令第22条の3において規定している程度の障害を複数併せ有する者」を指している。「重度・重複障害児に対する学校教育のあり方について（報告）」（1975）では、「重度・重複障害者」について、発達的側面や行動的側面からみて障害の程度が極めて重い重度障害を加えており、重複障害と重度障害の両者を含む幅広い概念としている。本研究ではこの両定義を踏襲する。

（２）「自己決定」

Wehmeyer（2003）は自己決定（self-determination）を「自分自身の人生において主要な原因的行為者として行動し、外部から不当な影響や干渉を受け止めることなく、ＱＯＬを高める選択や決定するために要求される態度や能力」としている。重度・重複障害を有する児童生徒の中には、音声言語による意思表示の難しい者も少なくない。そこで、指導にかかわる複数の教員の眼で当該児童生徒の意思をその視線、表情、動作等から丁寧に捉え、選択行為を通した自己決定を可能にする手立てを講じる必要がある。

３　衣服指導とファッションショー

（１）衣服指導の意義

本校高等部では2015年当時、学科としての家庭科の指導と並行して、自立活動や日常生活の指導で、衣服に関する指導を実施していた。本校の生徒は中学部入学の時から制服を着用して登下校をしているが、余暇や実習先での私服に関する指導は、そのほとんどが各家庭に委ねられていた。個人的な好みや志向が色濃く反映される事柄でもあるので、改めて「指導」する必要性があるのかという意見もあろう。しかし、雙田・鳴海（2005）は、生徒が衣服を自己選択することによるＱＯＬの向上効果を示した。また、読売新聞（2015）はデザイナー高田賢三の言葉「ファッションは軽そうに見えて実はすごい力

を持っている。服が社会を反映する」ことを紹介している。また読売新聞（2015）は京都服飾文化研究財団理事深井晃子の言葉「ファッションは社会の変化と連動する。今、装いはこれまで以上に着る人の価値観やライフスタイルを表すものになる」ことを紹介している。これらの意見から、衣服の装いについて学ぶことは社会生活を営む上で大きな意義があると考える。特別支援学校高等部学習指導要領（2019）「家庭」の1段階（2）内容Ｂ「衣食住の生活」の「ウ　衣服の選択」に「衣服と社会生活との関わりが分かり、目的に応じた着用、個性を生かす着用及び衣服の適切な選択について理解すること」が取り上げられている。そこで、生徒が自分のライフステージの様々な場面で「今日はこの服を着よう」と判断したり、選んだりできるようになることを指導目標に置くこととした。衣服を装うことには、自分の着る服を自己選択すること、服を着て自己表現することの２つの側面があると考える。そこで本研究では「衣服の自己選択」を授業で取り扱い、「衣服を着ての自己表現」を文化祭でのプログラムとしてのファッションショーで取り扱うこととする。

（2）ファッションショーの意義

第一筆者が重度・重複障害を有する生徒の担任であった時、保護者から「集団の中で、他の生徒と同じ経験をさせたい」という願いを聞いていた。学校行事である文化祭の舞台での発表に関しても、保護者の願いは大きいように感じられた。文化祭には、保護者以外にも大勢の来校者があり、地域の人や生徒の利用する施設の職員も多く訪れる。その文化祭会場で、「ファッションショー」を体験することにより生徒に予想される効果として、他者から認められることで自己有用感が高まること、自信がつくこと、衣服への興味・関心が高まること、衣服に関する会話が周囲の人と増えること等が期待される。これらは、特に重度・重複障害を有する児童生徒のＱＯＬ（生活の質）の向上にとって大きな力になると思われる。教員にとっても、衣生活に関する指導の視点が増えることと思われる。

折しも、本校は創立110周年の年を迎えており、第一筆者からの学校長への依頼に基づき、2015年の文化祭の特別企画として「ファッションショー」が挙行される運びとなった。

（3）事前のイメージ図の制作

指導前に、四季それぞれにちなんだ衣服を着用した生徒複数名のイメージ図（図２）を第一筆者と第二筆者で相談しつつ描くことを通して、重度・重複障害を有する児童生徒にとっての衣服の自己選択と自己表現に関する具体的なイメージを持つこととした。

図２　第一筆者が描いたイメージ図の一例「夏の楽しい服」

４　授業実践の計画

授業の実施にあたり、衣服の自己選択と自己表現を中心に据えた実践計画を表２に示す。

授業実践の第１として、生徒の衣服に関する意識を把握するためにアンケート調査を行う。このアンケート結果をもとに、授業実践の第２として「ファッションショー」を計画し、衣服を着用しての自己表現を試みる。ファッションショーは、学校内外の観客が多く来校する文化祭で実施する。重度・重複障害の児童生徒に対しても、他の児童生徒と同じ場で自己表現させる。授業実践の第３として、シミュレーションソフト「色彩プランナー」（株式会社ゴーシン）を用いて衣服の色やコーディネートを画面上で生徒が選び、意見を述べ合う学習指導を行う。

５　倫理的配慮

学校長、学級担任、授業に関係する教員、対象幼児児童生徒の保護者に対して研究の目的、個人情報の保護等について口頭及び文書で説明を行い、同意を得た。

６　授業実践

（1）衣服に関するアンケート

①アンケート調査の内容

幼児児童生徒及び保護者の「衣服への関心」や「着装に対する感じ方」の意識を調査するために、図３に示す「衣服に関するアンケート」を全校幼児児童生徒94名に対して実施した。回答が困難な場合には保護者に依頼した。項目は、「服を選ぶこと」「服を着る時の気持ち」「服について」の３点が中心である。設問１では、自分の服は誰が選んでいるのかという問いに対して、服を選ぶ人

表２　授業実践計画

７月　「衣服に関するアンケート」を全校幼児児童生徒へ実施し、ファッションショーの構成を考える			
８月　ファッションショー参加希望者へ具体的な衣装の希望調査、音響・映像の準備			
９月　ファッションショー出演者の練習			
10月４日（日）　文化祭においてファッションショー			
（以下は授業計画のための目的・学習事項である） 学習の目的：日常の衣服に興味や関心を持ち、衣服を選択する意思を持つことができる 学 習 事 項：１.色彩を中心として衣服に関心を持つ ２.衣服の働きに気付き、衣服の選択について考える ３.シミュレーションソフトを用いて自分らしい衣服のコーディネートをデザインする			
	学習目標	対象生徒と学習項目	指導の内容
2015年 7／15 ２校時	・仕事着の目的と色による印象に気付く	【高等部家庭科】１／７ 仕事着について 「種類と着る理由」	・現場実習中の各自の服装を実習中の写真を見て思い出す ・ウェビングの１回目を実施する
7／16 ２校時	・自分の好きな色を伝えようとする	【高等部自立活動】１／１ 服の色 「自分の好きな服の色」	・色画用紙をＴシャツにみたて、鏡で表情を確認する
12／1 ５校時	・衣服の働き（保健衛生面や、健康面）を季節にあわせて考える	【高等部家庭科】 ２／７、３／７ 季節による服の組み合わせ 「被服気候」	・文化祭でのファッションショーのビデオを観て、季節と服の関係に気付く
12／2 ２校時			・季節に合わせて体温調節ができるように洋服のサンプルを組み合わせる
12／8 ５校時	・服の色による印象の違いや服の色が気持ちを表すことを知る ・服のコーディネートに関心を持つ	【高等部家庭科】 ４／７、５／７ 洋服のコーディネートを考える	・色のもつイメージを伝える。 ・シミュレーションソフトを使用し、洋服の色を変えて印象を確かめる
12／9 ２校時			
12／15 ５校時	・TPO に応じて衣服を変えることに気付く ・服のコーディネートを主体的に選択・決定しようとする	【高等部家庭科】 ６／７、７／７ ＴＰＯに応じた洋服選び	・フォーマルな装い方について（３年生）
12／16 ２校時			・まとめ ・ウェビングの２回目を実施する
2016年 1／20 ５校時	・活動着と休息着を目的に合わせて選ぼうとする ・服の色や素材の違いに興味を持つ ・季節や目的を意識して服を選ぼうとする	【中学部自立活動】１／２ 洋服の色や素材 衣服の自己選択 （登校時と就寝時の服）	・洋服の色、自分の好きな色を選ぶ ・シミュレーションソフトを使用し、自分が着たい洋服を画面に表す
1／21 ３校時		【自立活動】２／２ 洋服の色や素材 衣服の自己選択 （凧揚げに着ていく服）	

【アンケートについて】

①～⑨の質問で、自分に合うものを１～４の中から選んで○をつけて下さい。また、相愛フェスタで『ファッションショー』に参加していただける方は、紙面下 [　] にご記入下さい。

＊該当する学部に○をつけて下さい　　幼　・　小　・　中　・　普　・　理療

＊性別に○をして、年齢を記入して下さい　　男　・　女　　年齢　　歳

１．服を選ぶことについて質問します。

① あなたが着る服を選ぶのは誰ですか（３は｛から選び○をつけて下さい）

１：自分で選ぶ　２：決まっていない　３：他の人に選んでもらう　｛親／きょうだい／その他（　　）

② 服を選ぶときに気を付けることは何ですか

１：素材　２：色　３：形　４：その他（　　）

③ 服のコーディネート（組み合わせ）を考えることはいかがですか

１：楽しい　２：どちらでもない　３：面倒だ　４：その他（　　）

２．服を着る時の気持ちについて質問します。

④ 自分の好きな服を着ると気分がいい

１：そう思う　２：どちらでもない　３：そうは思わない　４：その他（　　）

⑤ その時の気分に合った服を着ると安心する

１：そう思う　２：どちらでもない　３：そうは思わない　４：その他（　　）

⑥ 着ると自分がかっこよく見える服がある

１：そう思う　２：どちらでもない　３：そうは思わない　４：その他（　　）

３．服について質問します。

⑦ 季節に合わせて服を変えることをどう思いますか

１：楽しみである　２：どちらでもない　３：大変だ（変えたくない）　４：その他（　　）

⑧ 服の組み合わせについて工夫をしている

１：している　２：どちらでもない　３：していない　４：その他（　　）

⑨ 服は自分を表現するものだと思う

１：そう思う　２：どちらでもない　３：そうは思わない　４：その他（　　）

参加希望の場合は、以下にご記入下さい

１１０周年記念（平成２７年度）相愛フェスタで行われるファッションショーに参加します。

（学部）　幼　・　小　・　中　・　普　・　理療　　（学年）　　（組）

（氏名）

＊７月１０日（金）までに担任へご提出ください。　　ご協力ありがとうございました。

図３　衣服に関するアンケート

を３つの選択肢から回答する。同様に、服を選ぶときの要素や、コーディネートについての質問が続く。設問２は衣服の着用と気持ちの関係を問う内容である。好みの服への思いや着用時の昂揚感を調査する。設問３は、季節によって衣服を変えること、服の組合せ、及び自己表現に関する項目である。このアンケートの結果から、幼児児童生徒及び保護者の衣服に関する意識の現状を明らかにし、ファッションショーの構成を考えることとした。なお、文末にはファッションショーの出演参加希望欄を設けた。

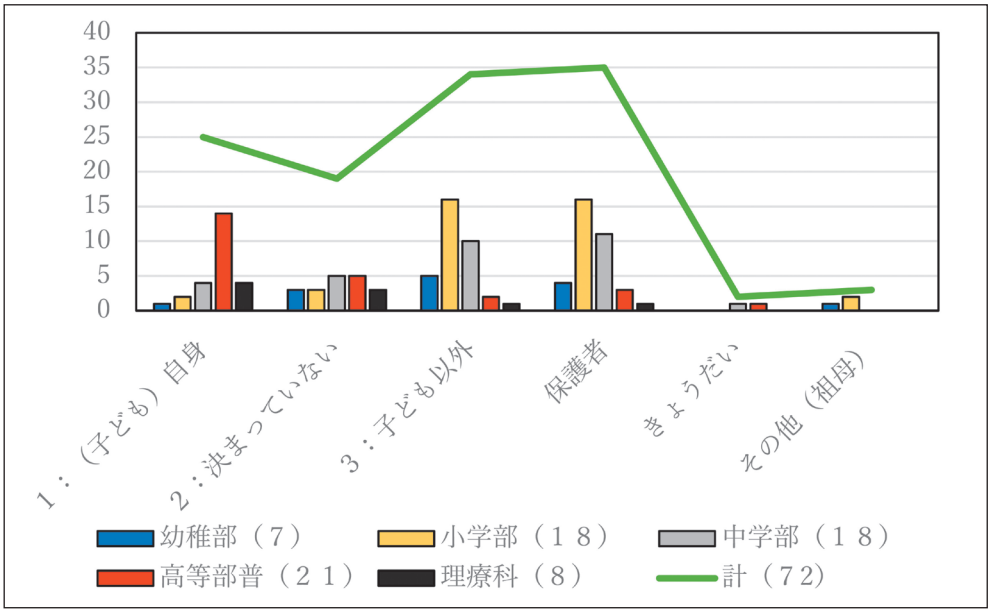


図４　設問１－①「あなたが着る服を選ぶのは誰ですか」の回答結果

②アンケート調査の結果とファッションショーとの関連

回収率は77％であった。図４は、設問１－①「あなたが着る服を選ぶのは誰ですか」の回答結果である。生徒の着る服を選ぶ人は、本人より保護者が全体的に多いことがわかる。高等部になると服を自己選択する生徒が多くなり、アンケート記入もほとんど生徒自身が行っていた。小学部、中学部の保護者への聞き取り調査をアンケート後に行ったところ、児童生徒が放課後に利用する施設等では、衣服は保護者が選んだものを着用することが多い傾向にあった。アンケートの回答には、ファッションショーへの期待も記載されていた。

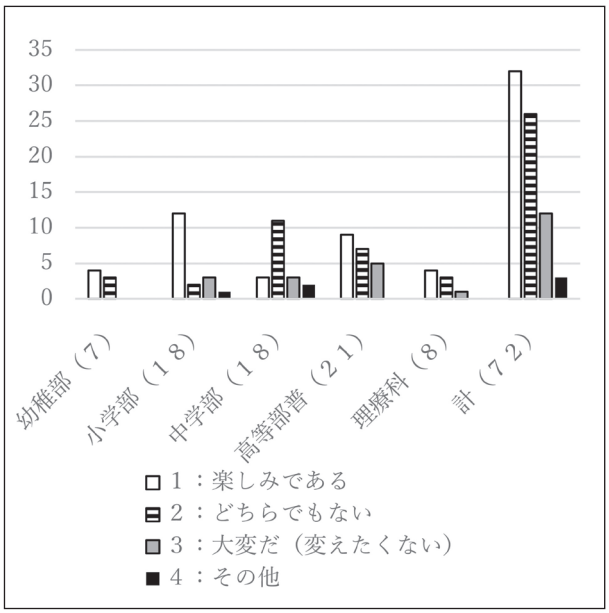


図５　設問３－⑦「季節に合わせて服を変えることをどう思いますか」の回答結果

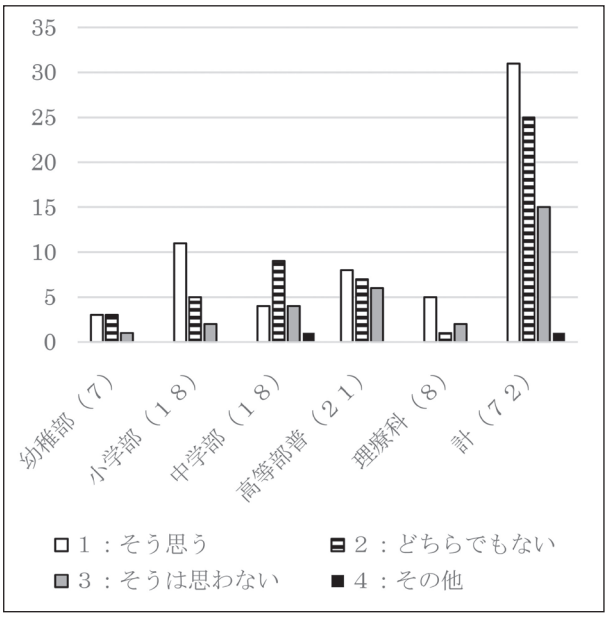


図６　設問３－⑨「服は自分を表現するものだと思う」の回答結果

図５は、設問３－⑦「季節に合わせて服を変えることをどう思いますか」の回答結果である。季節に合わせて服を変えることが「楽しみである」という回答が多かったことから、ファッションショーを四季の場面で構成することとした。回答の「その他」に「子どもにとって、暑さ、寒さの程度がわからないようだ」という保護者からの意見が中学部に２名、小学部に１名あったので直接話を聞くと、「体感温度の差から衣服の調節ができることが望ましいので、暑い、寒いの意思表示ができるようになってほしい」との回答であった。障害の程度や発達段階に応じて、意思表示を必要とする場面を適切に設定していく必要性が示唆された。

お子さまのお名前＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

◎日頃の洋服選びに関して、以下の事柄について教えてください。

１．お子さまの好きな色は何色ですか？（複数可）

〔　　〕

２．お子さまの好きな柄はありますか？

〔　　〕

３．どのような組み合わせをすることがよくありますか？
（例：シャツとズボン、つなぎの服、ワンピース･･･等）

〔　　〕

◎現在、ファッションショーの場面を四季で構成しようと考えています。
（春：入学式、　夏：花火大会、　秋：遠足・収穫祭、　冬：年末年始）

１．どの季節場面で出演されたいですか？上記以外の場面でも結構です。

〔　　〕

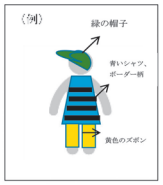
２．　１の場面で似合いそうな服をお持ちでしたら、具体的に教えてください。

〔　　〕

３．今回のファッションショーで、お子さまが着たいと思っている服がありますか？また、その理由を書ける範囲で教えていただけますか。

（　　）

今回のファッションショーでお子さまが着たいと思っている服、またはお気に入りの服を描いていただけませんでしょうか。
＊描画が難しい場合は白紙のままで結構です。



＊８月５日（水）全校登校日に学部主事までご提出ください。

ありがとうございました。

図７　ファッションショー参加希望者への「季節の中で着たい服」調査用紙

図６は、設問３－⑨「服は自分を表現するものだと思う」の回答結果である。「服は自分を表現するもの」ととらえている生徒と保護者が多い傾向にある。特に、小学部の重度・重複障害の児童の保護者から多く示され、発語は難しいと思われる児童であっても、「「素敵」「似合うね」という言葉をかけてもらうことは、着ている本人の喜びになっている」という意の保護者のコメントが含まれていた。「だからファッションショーへ参加したい」という言葉も添えられていた。また、高等部は理療科も含めると、多くの生徒が「服は自己表現できるもの」と考えている。実際、人は衣服によって自己表現したいと考えていることが報告されている（鈴木・神山, 2003）。

また、同アンケートを通して、ファッションショーへの参加出演を募ったところ、24名（幼稚部３名、小学部８名、中学部７名、高等部普通科６名）の参加申し込みがあった。障害の内訳は以下の通りである。

幼稚部３名（聴覚障害３名）
小学部８名（知的障害３名、聴覚障害２名、重度・重複障害３名）
中学部７名（知的障害２名、知的・視覚障害１名、重度・重複障害３名）
高等部普通科６名（知的障害３名、知的・視覚障害１名、病弱１名）

（２）ファッションショー

①ファッションショーの構成

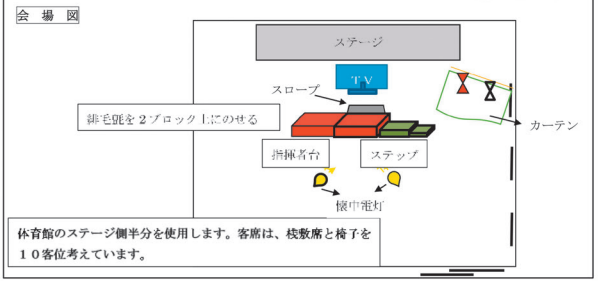
ファッションショーの参加希望者に対し、「季節の中で着たい服」について調査用紙（図７）を用いて調査し、出場場面と衣装を決定した。

ファッションショーについて、図８に場面構成と会場図、図９にシナリオ、図10にタイムスケジュールを示した。事前に関係教員と共通理解を図り、参加希望者へは障害に応じた配慮と支援を行った。車椅子の移動を考慮して、会場は体育館フロアー上とし、スロープ等を準備した。希望調査票に記載された希望にそって、季節のシーンごとに出演者数ができるだけ均等になるようにした。また、季節のイメージ画像を後方の大型ＴＶ画面に映し出した。そして、衣装説明については、家庭から寄せられたエピソードを交えたナレーションを作成し、情報保障として、要約筆記を行った。

ファッションショー構成　＊４部構成（四季）

季節		シーン	出演者（学部）
春（5名）	1	入学式	IA（小）、SY（中）、NK（中）
	2	花見	EM（高）、OM（高）
夏（6名）	3	海に山に	KT（小）、FY（幼）
	4	野球、サッカー	NS（小）、OY（中）
	5	花火	TS（小）、UK（高）
秋（8名）	6	遠足（修学旅行）	SS（幼）、SR（幼）、OT（中）
			AF（中）、SY（高）
	7	ハロウィン	AM（中）、OR（高）
	8	七五三	MM（小）
冬（5名）	9	雪	NM（高）、YS（小）
	10	クリスマス	AS（小）、TM（小）、MS（中）

会　場　図



休育館のステージ側半分を使用します。客席は、桟敷席と椅子を１０客位考えています。

図８　場面構成と会場図

【ナレーション】
これより　下関南総合支援学校１１０周年記念相愛フェスタ　特別企画「ファッションショー」を開催いたします。

会場はステージ側半分で、ステージを背に大型テレビ、スロープ、ステップが３段ございます。
客席はステップを囲むようにマットが敷いてあります。

幼稚部から高等部の有志によるモデルが、お気に入りの服で登場します。ポーズが決まりましたら、あたたかい拍手をお願いいたします。

【ナレーション】	【モデルの動き】	【音響】	【映像】
春です。入学式ではかわいい１年生が入学してきました。	各シーンNoモデルは一緒にカーテンから登場する。赤い台に上り、ポーズをとる。	シンディローパー「ダンステリアはキャフェテリア」	（思案中）
岩○さんは黒基調チェックのスーツです。ピンクの蝶ネクタイがポイントです。 末○君は、お母さんの手作りの制服です。紺色のブレザーが素敵です。しっかりとした足取りです 長○さんは、制服を着ると「大好きな学校へ行ける」と気持ちが高まるそうです。 ポーズが決まりました。	**１（入学式）入場** **岩○さんポーズ。** ステップを降りて右側に待機。 **末○くんポーズ。** 同じく右側に待機する。 **長○さんポーズ。**	→フェードアウト	
春といえば、お花見です。 江○さんお気に入りコーディネートは、デニムジャケットに黄色いシャツの組み合わせです。青いキュロットパンツが軽快ですね。 岡○さんの青いスカートは金色が入って素敵なドレスですね。	**２（花見）入場** （江○さんは岡○さんを手引き） 並んで、 **江○さんポーズ。** **岡○さんポーズ** 一緒にステップを降りて左に待機。	AKB「桜の栞」 →フェードアウト	桜 南国、海
夏になりました。 是○君のＴシャツは、トロピカルなパイナップル柄です。海にぴったりですね。 藤○君は、この夏、Ｔシャツとズボンでさわやかに過ごしたそうです。 中○君は、野球のユニフォームがよく似合っています。 岡○君、サッカー選手みたいで、かっこいいですね。	**３（海に山に）入場** **是○くんポーズ。** スロープを降りて右側に待機する。 **藤○くんポーズ。** **４（スポーツ）入場** **中○くんポーズ。** 降りて左側に待機。 **岡○くんポーズ。**	井上陽水「少年時代」 →フェードアウト 「コンバットマーチ」 →フェードアウト ＥＸＩＬＥ「ハレルヤ」 →フェードアウト	甲子園（下商） サッカー

図９　シナリオ

時間	操出（日高）	参加者（担当）動き	ナレーション（津畑）	音響（原田）・映像
13：30	１を待機させ、２以降順次並ばせる	岩○、末○、長○カーテンに待機	これより、下関南総合支援学校１１０周年記念　相愛フェスタ特別企画「ファッションショー」を開催いたします。会場はステージ側半分で、ステージを背に大型テレビ、スロープ、ステップが３段ございます。客席はステップを囲むようにマットが敷いてあります。１年間の季節場面をお気に入りの服で登場します。ポーズが決まりましたら、あたたかい拍手をお願いいたします。	
13：31 13：32 2 カーテンから出る。 江○移動。	岩○（介学生）、末○（西口）、長○（原） カーテンから台へ移動。	**岩○（益城）** 岩○台でポーズ。 台を降りる。 **末○（西口）、長○（原）** 台に上がる。 末○ポーズ。 長○ポーズ。 末○、長○降りる	春です。入学式ではかわいい１年生が入学してきました。 岩○あ○さんは黒いチェックのスーツです。ピンクの蝶ネクタイがポイントです。 末○ゆ○君は、詰襟の学生服がりりしいですね。しっかりとした足取りです。 長○こ○さんは、このセーラー服を着ると「大好きな学校へ行ける」と思われるそうです。 ポーズが決まりました。	シンディーローパー →フェードアウト
13：34	3 カーテンから出る。 是○、藤○移動。	**江○台に上がる（介学生）**ポーズ。降りる。	春と言えば、お花見です。 江○み○さんお気に入りコーディネートは、デニムジャケットに黄色いシャツの組み合わせです。青いキュロットパンツが軽快ですね。	AKB「桜の栞」 →フェードアウト
13：35	4 カーテンから出る。 中、岡○ゆ（西口）移動。	台に二人で乗る。 **是○ポーズ。（介学生）** **藤○ーズ。（介学生）** スロープを降りる。	夏になりました。 是○ち○君の Ｔ シャツは、トロピカルなパイナップル柄です。海にぴったりですね。藤○ゆ○君は、この夏、Ｔシャツとズボンでさわやかに過ごしたそうです。	井上陽水「少年時代」 →フェードアウト
13：36	5 カーテンから出る。 田○、梅○移動。	**中○ポーズ。** ステップで待機。 **岡○ポーズ。（西口）** 中○、岡○降りる。	中○そ○君は、野球のユニフォームがよく似合っています。休みの日は、地域の野球チームで練習しています。 岡○ゆ○君、サッカー選手みたいで、かっこいいですね。	「コンバットマーチ」 →フェードアウト EXILE「ハレルヤ」 →フェードアウト

図10　タイムスケジュール

②ファッションショーの実際（四季の場面で構成したショーの一部を抜粋）

春；初めて制服を着たうれしさを中学部1年生の女子生徒が表現した。ナレーションでは、「これを着ると学校に行けるので、朝はセーラー服を自分で選ぶ」であった（写真１）。「花見に着て行く服」で登場した高等部女子生徒は、桜を見上げるポーズを自ら考えて、ポーズをとった（写真２）。

写真１

写真２

夏；甲子園でかかるコンバットマーチにあわせて小学部児童はバットをかまえた（写真３）。保護者からは、「休日の過ごし方をユニフォームで表したい」とのコメントが寄せられていた。中学部男子生徒は、サッカー日本代表ユニフォームを着ている（写真４）。このユニフォームについて話しかけられると笑顔を見せて喜ぶ様子が出演中にみられた。

写真３

写真４

秋；昨年の修学旅行先で購入した思い入れのあるＴシャツを着た中学部男子生徒と、次週に出発する修学旅行で着る服を着た高等部男子生徒が、息を合わせた演技でポーズを決めた（写真５）。日本の風習である七五三の場面では、小学部女児の出演に際して保護者から「ここまで生きられたことのありがたさを感じた」とのコメントが寄せられた（写真６）。

写真５

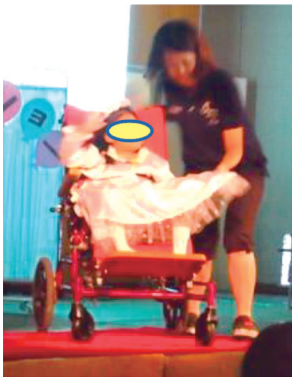


写真６

冬；高等部女子生徒は、三年間の作業学習で習得したさをり織りのマフラーを巻いて登場した。生徒は引っ込み思案の性格であったが、卒業に向けて「自分を変えたい」と参加を希望した。当日は前を向いて堂々とポーズを撮ることができた（写真７）。この生徒は後日新聞に掲載（写真８）された。文化祭の振り返り学習で、「ファッションショーに出たことが印象に残った」と表現した。

写真７

児童らファッションショー

南総合支援学校　四季テーマに服選び

下関市幡生町の下関南総合支援学校（田代雅昭校長、94人）の児童、生徒たちが4日、同校体育館で「四季」をテーマにした服を身にまとい、華麗なファッションショーを繰り広げた。

文化祭兼学習発表会「創立110周年記念相愛フェスタ」の催しの一つで、初開催。幼稚部から高等部の希望者24人が5月から、家族や教諭らと一緒に服選びやリハーサルを重ねるなど、準備を重ねてきた。

児童、生徒たちは音楽が流れる中、ドレス姿などで赤いカーペットの上を歩きながら登場。壇上でポーズを決めると、保護者や住民ら約300人から温かい拍手が送られた。

高等部2年の[redacted]さん(16)は「ドレスを着たことがなかったので、うれしかった」。さをり織りのマフラーを自作した同3年の[redacted]さん(18)「モデル気分を味わえた」と喜んでいた。

フェスタではこのほか、学校で栽培した野菜の販売や、劇の上演、貼り絵、習字の展示なども行われた。

自作のマフラーを掲げる出演者

写真８（読売新聞2015年10月９日（金））

③ファッションショー実施後のアンケート結果と考察

（ア）回答数の分析と考察

ファッションショー実施後、当ショーに参加出演した幼児児童生徒、観客席にいた幼児児童生徒、出演者に関係した教員を対象に、衣服に対する意識の変化を調査するために、「ファッションショーに関するアンケート」を実施した（図11、図12）。幼稚部５名、小学部14名、中学部４名、高等部普通科20名、高等部理療科６名、計49名からの回答があった。また教員25名（回収率61％）からの回答があった（総計74名）。

まず、ファッションショーの実施について、「実施されてよかった」に関して、総計74名中「はい」の回答が53名（72％）と多くみられた（図13）。

【ファッションショーに関するアンケート】

相愛フェスタ『ファッションショー』では皆様のご協力のお蔭をもちまして、盛況にショーを終えることができました。心より御礼申し上げます。本校において初めての取り組みであり、皆様のご感想等をお聞かせ頂きたいと思います。

つきましては、ショーに関するアンケートへのご協力をよろしくお願いいたします。

＊該当する学部、性別に○をつけて、年齢を記入して下さい　　幼・小・中・普・理

男・女　　年齢　　歳

1．ファッションショーに出演した（1：はい　2：いいえ）

2．ファッションショーを観覧した（1：はい　2：いいえ）

3．ファッションショーに興味があった（1：はい　2：どちらでもない　3：いいえ）

4．ショーを観てファッションに興味を持った　（1：はい　2：どちらでもない　3：いいえ）

5．ファッションショーが実施されてよかった　（1：はい　2：どちらでもない　3：いいえ）

6．次回ファッションショーがあれば出演したい　（1：はい　2：どちらでもない　3：いいえ）

7．ファッションショーのご感想やご意見を自由にお聞かせください。

＊10月16日（金）までに担任へご提出ください。
ご協力ありがとうございました。

図11　アンケート（対幼児児童生徒）

【ファッションショーに関するアンケート】（教員版）

相愛フェスタ『ファッションショー』では先生方のご理解ご協力をいただき、盛況にショーを終えることができました。心より御礼申し上げます。モデル一人一人の想いに添えたものであったか、先生方のご感想等をお聞かせ頂けましたら幸いです。つきましては、ファッションショーに関するアンケートのご協力をよろしくお願いいたします。

1　ファッションショーが行われて服への関心が高まった。
　1：そう思う　2：変わらない　3：そう思わない　4：その他（　　）

2　担当する幼児児童生徒とファッションのことが話題にあがるようになった。
　1：そう思う　2：変わらない　3：そう思わない　4：その他（　　）

3　担当する幼児児童生徒の保護者とファッションのことが話題にあがるようになった。
　1：そう思う　2：変わらない　3：そう思わない　4：その他（　　）

4　ファッションショーが実施されてよかった
　1：そう思う　2：変わらない　3：そう思わない　4：その他（　　）

5　次回もファッションショーを続けたいと思う
　1：そう思う　2：変わらない　3：そう思わない　4：その他（　　）

6　ファッションショーのご感想やご意見を自由にお聞かせください。

＊10月16日（金）までに各部主事へご提出ください。
ご協力ありがとうございました。

図12　アンケート（対教員）

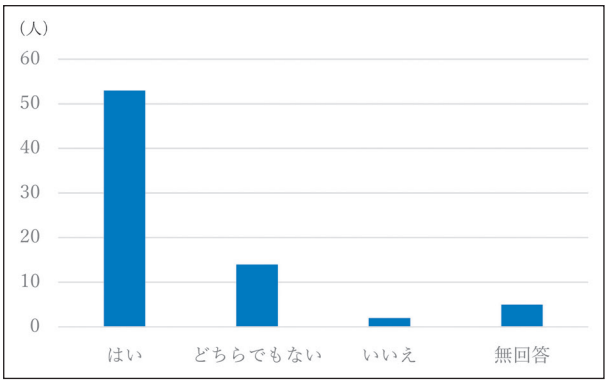


図13　設問「ファッションショーが実施されてよかった」の結果

次に、ファッションショーを観た後の幼児児童生徒の意識の変化について、設問「ショーを観てファッションに興味を持った」に関して、幼児児童生徒の総計49名中「はい」の回答が19名（39％）であった（図14）。「いいえ」の回答と無回答はそれぞれ６名（12％）であったことから、ファッションショーは、概ね肯定的に受け止められたことがうかがえた。

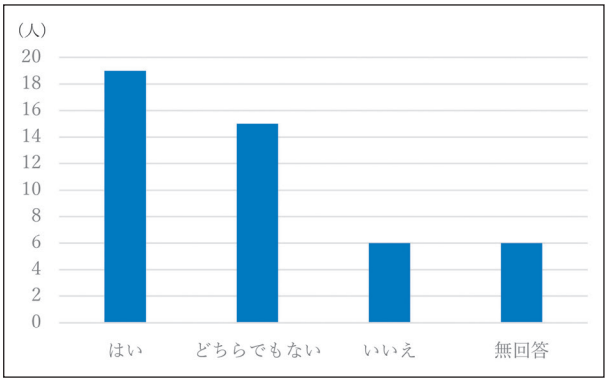


図14　設問「ショーを観てファッションに興味を持った」の結果

（イ）自由記述内容の分析

以下、生徒、保護者、教員の感想の一部を掲載する。なお、（　）は、総計74名の自由記述欄に見られた同じ内容の回答件数である。

●高等部生徒からの感想と考察

・出演した生徒から「たくさんのお客さんに見てもらって「かわいい」と言ってもらい拍手をしてもらってとてもうれしかった」（７件）

・観客席の生徒から「次回あるとしたら見に行きたい」(11件)

ファッションショーに出演した生徒は、自分の選んだ服を着て、スポットライトを浴びる体験や、恥ずかしさを克服したことが自信につながり、自己有用感が増したと思われる。観客であった生徒からは、光の中を歩いてくる友達を観て感動したり、ポーズを取る姿を見て「自分もしてみたい」と感じたり、また観たいと思った様子がみられ、服や着こなすことへ関心を高めていたことがうかがえた。

●保護者からの感想と考察

・幼稚部保護者から「それぞれが、お洒落を楽しんで、自分を表現することのきっかけになったらよい」(11件)
・小学部保護者から「ＴＰＯにあわせて服を選択したりすることはとても大事なことで、楽しみの１つとして、洋服を好きになることはとてもすてきなことだと思った」(４件)
・中学部保護者から「とても素敵なショーだった。出演していた子ども達がとても生き生きとしていた」(14件)
・高等部保護者から「テーマに沿って装いを発表していてよかった」(３件)

幼児児童の保護者からは、衣服によって自己を表現できるととらえる傾向がみられた。幼児児童生徒の着る服を選ぶ人は保護者が多いことから（図４)、保護者が我が子の衣服を表現の手段として選んでいることがうかがえる。音声発語のない生徒の保護者からは、「着ている服について話しかけられた時の子どもの表情がよい」ことから、「服装に気を遣っている」という回答もあった。概ね、ファッションショーを好意的に受け止め、継続を希望する（19件）との回答が多かった。

●教員からの感想と考察

・「普段着の着こなしなど意識させることはとても大事なことですが、実際に指導することは難しいので、こういう機会で意識付けできると思った」
・「生活のひとつの要素である「衣」についてこのファッションショーをきっかけに考えていく場面や機会が増えていったらと思う」

衣生活の指導に関しての感想がみられた一方で、文化祭の内容としては規模が大きいので、教科（家庭科）の学習発表にしてみてはどうかという意見が３件あげられた。これらの意見を、今後の指導に生かしていきたい。

当アンケートからは、生徒、保護者、教員の多くから「生き生きとしていた」「出演者の笑顔がよかった」「いつもと違う（良い)表情が見られた」等の回答が得られた。また、観客席にいた高等部普通科男子生徒からは、「自分が出るには勇気がいるが、すごくいいなと思った。次の機会があったら、(出演を）考えたい」という意見が聞かれた。会場での感想や、文化祭後のアンケートから、ファッションショーを観た人は、衣服に関する興味・関心を高めたと考える。

（３）「衣服の自己選択」を目指した授業実践

①授業の概要

雙田･鳴海（前出)によると、肢体不自由養護学校（現;特別支援学校）における衣生活教育は、自立活動の時間と家庭科の授業で行われており、自立活動の時間に更衣練習などが行われ、家庭科の時間に染物や手芸などの実習を中心とした授業が行われているが、装い方（着装)、衣服の選択に関する学習はほとんどおこなわれていない。山口県内全ての県立総合支援学校１２校と山口大学教育学部附属特別支援学校の家庭科教員への調査（電話による聞き取り調査 2015年12月）においても、「被服製作」「洗濯の実習」「ＴＰＯにあわせた衣服について」といった内容は実践されていたが、「衣服の自己選択」に関しては実践されていないことが明らかになった。

そこで本研究では、本校高等部普通科の知的障害（視覚障害を含む）を有する生徒８名と重度・重複障害を有する生徒１名、中学部の重度・重複障害を有する生徒３名を対象に「衣服の自己選択」に関する授業を行うこととした。

（ア）実施期間

2015年７月～2016年１月

（イ）対象生徒

・知的障害（視覚障害を含む）を有する高等部普通科２、３学年生徒８名（表３）→2015年７月、12月に授業実施
・重度・重複障害を有する高等部普通科３学年生徒１名（表４）→2015年７月に授業実施
・重度･重複障害を有する中学部１学年生徒３名（表４）→2016年１月に授業実施

なお、表４に示している重度・重複障害を有する高等部普通科３学年生徒１名については、医療的ケアによる排痰や排泄等で授業を中断する結果となり、以降は生徒の体調面を考慮して授業の継続を断念した。その後、ファッションショーに参加していた中学部の重度・重複障害を有する生徒３名が文化祭以降に衣服指導が可能となったことにより、この３名を対象に授業を実施した。当指導の前には、授業や給食の時間を共に過ごし、生徒の実態把握を行うとともに、生徒と第一筆者とのラポートを形成するようにした。

表３　対象者生徒の実態（知的障害、重複障害）

生徒	性別	学年	障害の状態等	ファションショー参加
A	男	高２	知的障害	×
B	男	高２	知的障害	×
C	男	高２	知的障害、ダウン症	×
D	男	高２	知的障害、ダウン症	○
E	女	高２	知的障害	○
F	女	高２	知的障害、右足麻痺	×
G	女	高２	知的障害、視覚障害（全盲）	○
H	女	高３	知的障害	○

表４　対象者生徒の実態（重度・重複障害）

生徒	性別	学年	対象	障害の状態等	ファッションショー参加
I	男	高３	②	脳性麻痺、視覚障害、医療的ケア対象	×
J	男	中１	③	脳性麻痺、首が座っていない、全介助	○
K	男	中１	③	左半身麻痺、学習時に眼鏡を着用、立位可能	○
L	女	中１	③	立位、歩行可能、肝機能障害	○

（ウ）シミュレーションソフト「色彩プランナー」について

授業では、雙田･鳴海（前出）と同様にシミュレーションソフト（「色彩プランナー」株式会社ゴーシン）を用いることとした。このシミュレーションソフトは、衣食住を色彩コーディネートという観点から捉えており、本研究では、衣服領域を使用することとした。画面上のモデルについては、性別、体形、髪型、輪郭、肌の色を選ぶことができる。特に顔は、個人の顔写真を取りこむことが可能なので、生徒にとって学習意欲の喚起につながることが期待された。

②知的障害（視覚障害を含む）を有する生徒（高等部普通科）を対象とした授業の実際

（ア）授業（７月）

本実践の導入として高等部普通科の知的障害（視覚障害を含む）を有する生徒８名（表３）を対象に１時間（7/15）、授業を行った。普通科では６月が現場実習期間であったことから、仕事着の種類や、職場でのユニフォーム着用の理由を確認させた。本授業の終わりに、ウェビングの１回目を行った。

ウェビングとは、自由な発想を短い言葉で順次記載し、言葉間の関連性を線でつないでいく行為である。ウェビングの「ウェブ」とはクモの巣という意味で、ちょうどクモが巣を作るように１つのキーワードからつながりのある事柄を網のようにつなげていく。

用いた学習用プリントを図15に示す。このウェビングの目的は、衣服指導の授業受講によって生徒の衣生活上の意識変容が生じたか否かを分析することである。

当プリントには、下記のように３場面が色別に印字してある。

上（青色）・・・・「買い物や旅行に行くとき」
下左（黄色）・・・「友達と遊びに行くとき」
下右（赤色）・・・「お食事に行くとき」

それぞれの場面で連想される言葉を、その色と同じ色の付箋紙に書かせ、当プリントに貼らせた。

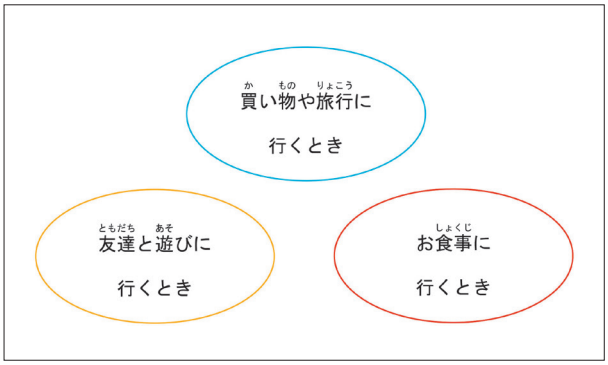


図15　生徒に配布した学習用プリント

（イ）授業（１２月）

８名中１名は、先天性の全盲であるため、言葉によってイメージの確認をとり、触れることで理解の定着を図れるようにした。授業計画は、表２に示したように２時間を１つのまとまりとして組み立てている。12月初旬の授業では、文化祭におけるファッションショーを大型ＴＶの映像で振り返った（写真９）。

計６時間分の授業のうち、４時間分の授業でシミュレーションソフト「色彩プランナー」をパソコンで操作し、大型ＴＶに映し出した。そして、最終授業でウェビングを行った。

写真９　大型TVを使用した授業

（ウ）ウェビング上での変化

一例として、生徒Ｈの意識の変容を図16に示す。７月の授業開始時に書いた付箋紙の枚数に比べて12月の授業終了時の付箋紙は１人平均９枚増加し、具体的な語句が多く見られた。特に大きな変容のみられたのは生徒Ａ、Ｅである（表５）。このことから、衣服に関して生徒の意識が高まったと考えられる。授業実践以前の生徒Ａは衣服に無関心であったが、シミュレーションソフトによる衣服のコーディネートに興味を持ち、積極的にシャツの色を変えたり、上下の衣服の組み合わせを楽しんだりする様子が他の授業担当者からも確認された。画面上で、服装の色を瞬時に変化させることができたことが、生徒の学習意欲を喚起させたと思われる。

図16　衣服に対する生徒Ｈの意識の変容

表５　ウェビング上での具体的な表記の変容

生徒・増加した語句数	７月に書かれた語句	12月に書かれた語句
生徒Ａ ８語 （１→９）	ふだんぎ	きれいな服、洗濯してある服、かっこいい服、かしこまった服、清潔な服、ブレザー、動きやすい服、Ｔシャツ、ジーパン
生徒Ｅ 16語 （４→20）	バック、カバン、ふつうの服、明るい服	上着を着る、紺色の服、法事、長袖、コート、かわいい服、靴、普通の服、スニーカー、スカート、ズボン、和服、半そで、くつした、Ｔシャツ、トレーナー、いろんなマークがついている、きれいな服、マフラー、手袋

（エ）シミュレーションソフトの使用

衣服を選ぶ基準として、色は重要な要素であるため、授業では「色」のもつイメージ（あたたかい、冷たい、優しそう等）に着目させることを目的にシミュレーションソフトを用いた。

生徒からの発言には、「赤の方が暖かそう」「若々しく感じる」等があった。シミュレーションの画面上で、自分の顔写真に服を組み合わせ、作品を互いに発表し合っ

た。そして衣服の色や組み合わせをさらに工夫していった。

本授業の活動では視覚障害（全盲）の生徒に対して段ボール紙の人形を用意した。紙の衣服模型を人形に被せて、衣服の形状や長さを指で触れさせた。その際に衣服の名称（チュニック、ワンピース等）を知らせて、本人がイメージできたこと（丈が長い、袖がない等）を言葉にさせた。そして、洋裁用ボディに着せた紙の衣服模型と同じ衣服の実物を触らせて、イメージした言葉を確認する作業を行った。当生徒には、シミュレーションソフトの画面上で組み合わせた内容や、他生徒の発表した衣服の組み合わせを教師が補足説明する等の個別支援を行った。また、当生徒にも自分で考えた衣服のコーディネートを段ボール紙の人形を使って発表させる場面を設定した（写真10）。

対象生徒群の中に３年生がいることから、社会人の装いを意識してＴＰＯに応じた洋服選びもシミュレーションと実物（スーツや革靴）を用いて授業を行い、画面上でスーツの色によって違う印象を感じ取り、ＴＰＯによる着用を考え、実物に触れて確かめる実践を行った（写真11）。

写真10　視覚障害（全盲）の生徒による発表

写真11　フォーマルな装いについての指導場面

授業の振り返りは、チャート式のプリント（図17）で、好みの色を選ばせたり、知識の定着が図れるように書き込みをさせたりした。視覚障害（全盲）の生徒には、同じ内容を点字に点訳して、イメージを言葉で表現できるように個別に支援した。

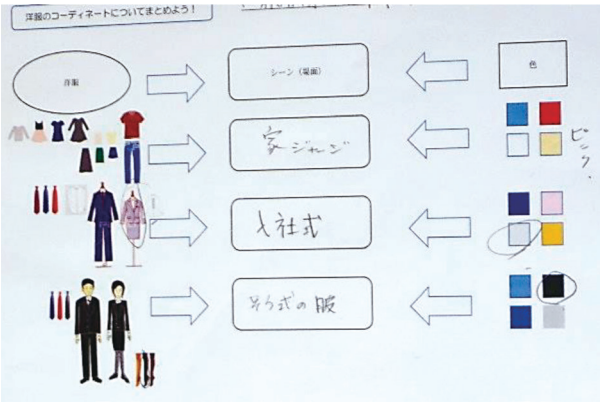


図17　授業の振り返りプリント

③重度・重複障害を有する生徒（中学部）を対象とした授業の実際

（ア）授業実践のポイント

３名の生徒は、皆ファッションショーに参加しており、保護者の衣服への関心も高い。授業前に保護者との面談を行い、家庭における生徒の衣生活の様子や留意点等についての回答を得た。学級担任や自立活動の授業担当者からも生徒の実態を聞き取り、授業内容を決定した。なお、学習指導は以下3点のポイントに基づいて実施した（表６）。

表６　学習指導のポイント

①色彩を中心として衣服に関心を持たせる。 （保護者、担任から事前に生徒の好きな色や着ている服の色等の情報収集） ②衣服の働きに気付き、衣服の選択について考えさせる。 （寒気に対する上着着用の意識、休息と活動を考慮した服装の選択） ③シミュレーションソフトを用いて自分らしい衣服をコーディネートさせる。 （事前に収集した情報をもとに、生徒の意見を表情や発声等で読み取りながら、大型ＴＶ画面上で衣服をコーディネートさせる）

（イ）授業（１月）

１時間目（1/20）に洋服の色や素材について取り上げ、素材の違いは実際に肌に触れさせ、色の違いや柄物を見

比べさせつつ好みの服を生徒に選び取らせた（写真１２）。そして、生徒の好みを聞きつつ、画面上で服の色等を決定していった（写真13）。

写真12　好みの服を生徒に選び取らせている場面

写真13　パソコン画面上で服の色等を決定させている場面

２時間目（1/21）は「凧揚げ」の学習活動が目前に予定されていたので、「凧揚げに着る服」という目的意識をもって、防寒着を選ぶ学習とした。また、活動着の選択では、生徒が放課後に取り組む機能訓練活動を連想し(写真14)、目的に合わせた衣服の選択を画面上で行うとともに、実際の活動着を指さしで選ばせた（写真15）。

７　結果と考察

ファッションショー後の生徒の感想やアンケート結果から、文化祭でファッションショーを実施したことで生徒の衣服への関心を高めることができたと考える。自分で選んだ服を着て人から「似合うね」「素敵ね」と褒められる経験は、「次はどれを着ようか」「これが着たい」等と、出かける時の装いを生徒が楽しみにすることにつながると考える。

写真14　活動着の選択を連想させている場面

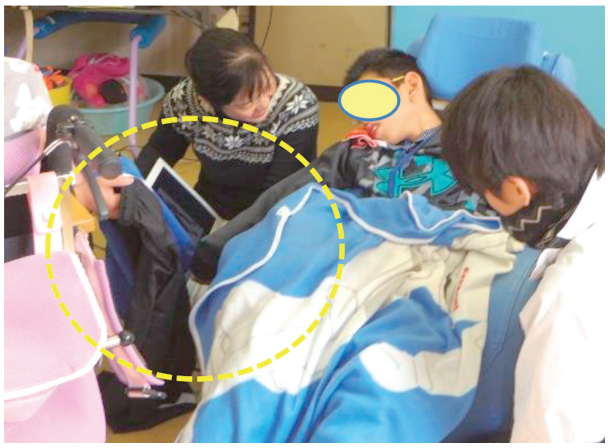


写真15　パソコン画面上で活動着を手で選ばせている場面

（1）ファッションショー後の変容について

多くの生徒は、ファッションショーに好印象をもっており、振り返りの学習では「ファッションショーを初めてみた」、「出演者のような服を自分も着てみたい」といった素直な感想が多く聞かれた。この「やってみたい」と生徒が思える学習活動を設定することが、生徒の変容を促す大切な要素であると考える。また、保護者と担任との間でこの取組を契機として衣服の話があがるようになったとの感想がアンケート記述にも見られた。生徒の利用が多い福祉サービス事業所や発達支援センターの職員からは「利用者とファッションショーの話をした」「なぜあの服で出演したの？」、小学部の保護者からは「ショーに参加してから、朝に着る服を子どもが自分で選ぶようになりました。それまでは私が選んでいたのに、我が子が意思をはっきり示すようになりました。」等の情報も第一筆者に寄せられた。これらは、児童生徒が衣服を自己選択し始めたことを表している。

さらに、ファッションショーに“さをり織りのマフラー”で出演した生徒が「自分の作ったマフラーでファッションショーに出たことが一番の思い出です。」

と2015年度卒業文集に記載していた。内気な生徒だったので、大勢の人の前でスポットライトを浴びることは勇気がいることであったと思われるが、自分の製作したマフラーを巻いた装いが人から注目され、褒められることで、達成感や充実感につながったものと思われる。

図18は、「衣服に関するアンケート」（図３）の設問２－④「好きな服を着ると気分がいい」の結果である。自分の好きな服（着心地、色、デザイン）を着ることが、気分を良くしていることがわかる。それゆえ、生徒にとって好きな服を自己選択する機会が増えることが、ＱＯＬの向上につながると期待される。

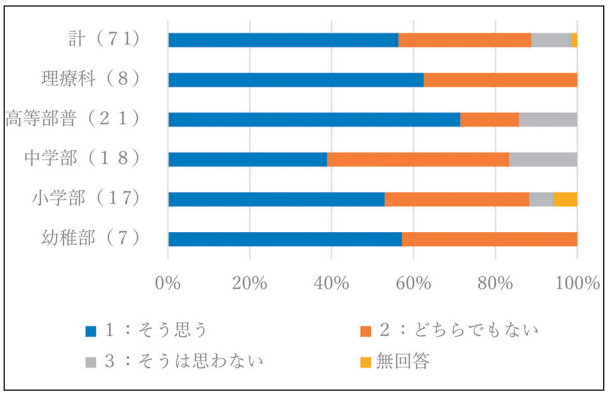


図18　設問２－④「好きな服を着ると気分がいい」の結果

（２）知的障害（視覚障害を含む）を有する生徒（高等部普通科）を対象とした授業「衣服指導」について

シミュレーションソフトを使用することで、衣服の色や組み合わせを、具体的な場面や用途に応じて選ぶことができるようになった。そして、授業内で実施したウェビングでの言葉の数が増加したことから、衣服に対する生徒の関心は高まった。生徒同士の学び合いにおいても、自分が好きな色に加えて友達の好きな色を参考にしたり、友達のアドバイスに耳を傾けたりする姿がみられようになった。

本実践にシミュレーションソフトを使用したことで、一瞬にして服の色を変えたり、コーディネートを変えたりできたことは、多くの生徒にとって理解しやすく、興味・関心が持続する学習につながった。視覚障害（全盲）の生徒に対しては、視覚でとらえる内容（色のイメージや服の組み合わせ）を言葉に置き換えさせ、生徒本人の思いやイメージを確認しながら指導を進めていった。また、実際に肌に触れさせたり、着用させたりしてより具体的なイメージをつかめるよう指導に工夫を加えていった。

８名の生徒は、衣服の機能を学び、衣服の色や組み合わせの感性を高めるうちに、学んだ知識を自分の言葉として表現し、衣服を主体的に選択しようとする意欲が高まった。そして、生徒の活発な発言から様々な意見交換ができたことは、互いの学び合いを通した学習の深まりをもたらしたと考える。

（３）重度・重複障害を有する生徒（中学部）を対象とした授業「衣服指導」について

ファッションショーの取組で、保護者と情報を交換し続けたことが授業実践の糸口となった。生徒３名には音声発語は無いが、第一筆者は声のトーンや表情から生徒の気持ちを察するよう努めた。その際、第一筆者以外の授業担当者も含めた複数の眼で生徒の表情から気持ちを読み取ろうと努めた。本授業においては、シミュレーションソフトを使用する場面で、互いに生徒同士で学び合う状況が生まれ、操作の順番を理解したり、友達のコーディネートを認め合ったりすることができた。

保護者からは、「子どもには私が準備した服をそのまま着せていたので、服を自分で選ばせたり、どちらの服にするか？等本人の気持ちを確かめたりしてみようと思う」等の回答があった。このことから、生徒による自己選択や衣服に関する親子のコミュニケーションが、生徒の衣生活の変容をもたらし始めたと考える。生徒の意思を尊重した衣服選びを家庭や利用施設においても意図的に行うことで、生徒の衣服による自己表現の機会が増えていくと思われる。そして、衣服を自分らしく着こなすことによって、今後の生徒のＱＯＬ向上が期待できると考える。

８　付記

本研究は、第一筆者が山口県教育委員会に提出した2015年度山口大学特別支援教育長期研修報告書を、第二筆者とともに加筆・修正したものである。

【引用文献】

中央教育審議会（2011）　今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）

雙田珠己・鳴海多恵子（2004）　肢体不自由養護学校における衣生活教育　日本家庭科教育学会平成16年度例会研究発表・シンポジウム要旨集，10－11.

雙田珠己・鳴海多恵子（2005）　肢体不自由養護学校における衣生活教育―授業計画の作成と実践による学習効果の検討―　特殊教育学研究，43(3)，215－224.

鈴木理沙・神山進（2003）　被服による自己呈示に関する研究「被服によって呈示したい自己」および「自己呈示に係わる被服行動」,日本繊維製品消費科学会誌，49，881－888.

特殊教育の改善に関する調査研究会（1975）　重度・重複障害児に対する学校教育のあり方について（報告）
文部科学省（2017）　特別支援学校小学部・中学部学習指導要領
文部科学省（2019）　特別支援学校高等部学習指導要領
文部科学省（2019）　特別支援学校学習指導要領解説総則編
Wehmeyer, M. L.（1992）Self-determination and the education of students with mental retardation. Education and Training in MentalRetardation, 27, 302-314.
読売新聞（2015年10月１日朝刊）　デザイナー高田賢三さん渡仏50年
読売新聞（2015年11月21日朝刊）　戦後70年装いの情景４